
フェスティバル王子

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェスティバル王子

【Nコード】

N77020

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

フェスティバル王子と名づけられた僕は王様とポリーおじさんと小さい王国で暮らしている。王国から出たら外は「穢れた世界」まだ子供の僕は決して出て行ってはいけない。

(前書き)

ファンタジーを書こうと思ったのに
ファンタジーではなくなりました。
少し遊びすぎました…

「王子たる者、誰よりも明るく、誰よりも強くあれ」

父はそう言つて僕を「フェスティバル」と名づけた。

しかし僕は控えめで、弱い人間に育つた。王子らしからぬ程に。

「王子！フェスティバル王子！！」

教育係のポリーおじさんに叩き起こされた。

僕は競技場に寝転がっていて、ああそうだ、ポリーおじさんに格闘技の指導を受けていてシバキ倒されたんだ。と気づいた。

「いてて…」

僕が身体を起こすと、ポリーおじさんは心配するでもなく

「王子たる者が、こんなことにも耐えられないとはけしからんことですよ！」

と言つて、僕を殴つた。

僕は頭を庇いながら、謝ることしかできない。

どうして僕はこんなに弱いんだろう。

身体は健康そのものなくせに、どれだけトレーニングをしようが、筋肉のキの字もつかない。

そんな僕を見て、ポリーおじさんは「精進が足らんからだ」と殴る。

「そんなことでは、まだまだ外の世界には出せませんなあ」

ポリーおじさんは腕を組みながら、床に臥せっている僕を見下ろす。

「…ごめんなさい」

僕は小さな声で謝った。

僕はこの王国の王子として生まれた。

お父さんは王国の建国者。王様。

お母さんはいない。

僕のお母さんは悪魔だった。

いち早くお母さんの中の悪魔を見つけ、追い出し、この国の平和を守ったのはポリーおじさん。

この国の勇者だ。

僕は悪魔の血が現れないよう、勇者の下で肉体的、精神的な修行を受けている。

王国の外は「穢れた世界」。子供の僕が出て行ったら、二度と帰って来れない恐ろしい世界。

その日は朝から誰もいなかった。

王様もポリーおじさんも「穢れた世界」に悪魔退治に行っているのだろう。

僕はおじさんに殴られて、青く晴れ上がった頬を押さえながら朝食を食べた。

僕は王国に誰もいないときは、ひそかに「見張りの部屋」に行き、「穢れた世界」を覗く。

誰にも目を合わないように。カーテンの隙間からこっそりと。

王様は言っていた。

「穢れた世界の住民は、皆疲れ果て肉体は動いていても、心が死んでいる。」

その心の中には大抵悪魔が住んでいて、その窓である目を見ると、お前の中に流れる悪魔の血が騒ぎ出すのだ」

ポリーおじさんは言っていた。

「穢れた世界は、空気が穢れている。人が穢れている。フェスティバル王子がもうちつと強くならなきゃあ、とても耐えられませんな」しかし僕の眼下に広がる世界は、人が笑いながら歩いている。

僕は不思議に思う。

あそこで笑いながらお母さんの手を引つ張っている子供にも、悪魔が宿っているのだろうか。

「僕も悪魔退治に連れて行ってください！」

僕はポリーおじさんがいない間にお父さんに頼んだ。

「穢れた世界をこの目で見てみたいのです」

王様は王様椅子に座って、額を押さえた。

「…お前は大きくなりすぎた。これ以上は無理だろう」

小さく呻くようにお父さんは言う。泣いているようにも見えた。

「お父さん、大丈夫ですか？」

僕は慌てて言う。

「…時が経ち過ぎたのだ。…もう無理だ」

「なんのことですか？ いったいどうしたのですか？」

僕が王様の肩に手を乗せようとしたとき、ポリーおじさんが外の世界から帰ってきた。

「ただいま戻りましたぞ」

外の世界に通じるドアからは、冷たい風が吹いてくる。

もうすぐ「穢れた世界」は暗黒期に入るようだ。

「どうしました。王様、フェスティバル王子」

ポリーおじさんは毒を飲んできたらしい。

顔が真っ赤になって、息がクサイ。

僕はいつものように毒消しの聖水を冷蔵庫から取ってこようとした

が、お父さんに手で止められた。

「裕樹。もう無理だ。こんなことは」

王様はポリーおじさんに向かって話している。

「お父さん？ユウキってなに？」

僕はポリーおじさんと王様の顔を交互に見た。

ポリーおじさんは一気に白んだ顔をした。

「そつだなあ。もう飽きたしなあ」

僕は二人が何を言っているのか分からなかった。

勇者であるポリーおじさんが、王様であるお父さんにこんな言い方をしてはいけないし、何故そのことを王様は怒らないのだろうか？

「もうお前、出て行けよ」

ポリーおじさんは突っ立っていた僕に言った。

何も分からないまま僕は「穢れた世界」へ追い出された。

ドアから出たときは一瞬息が吸えなくなるんじゃないかと身構えた。しかし呼吸を試みると王国の空気よりヒンヤリして気持ちがいい。もしかしたら僕は本当は悪魔なのかもしれない。

一人でとぼとぼと「穢れた世界」を歩いた。

何がいけなかったのか。

悪魔退治がしたいと言ったことが、そんなにもいけなかったのだろうか。

気がつくまで僕の周りには、見たことのない程たくさん「穢れた世界」の住人が歩いてた。

「どうしたのかな」

誰かが僕に話しかけた。

僕は悪魔だと思ってとっさに身構えた。
目を見たらいけない。

しかしその人はしゃがんで、僕の目線に合わせた。

僕は初めて間近に女の人を見た。

「…僕が、弱いから…」涙があふれた。

「あーあ、泣かないの。お父さんとお母さんは？」

「いなくなっちゃった」

女の人は僕の手をとって歩きだす。

「迷子ね。ほら、一緒に警察に行こう」

「うん」

僕は「ケイサツ」が分からなかったけど、もうなんでもいいような気がした。

僕の世界は王国から出たときに終わったのだ。

「ボク、お名前は？」

女の人が歩きながら聞いた。

僕の名前はフェスティバル王子。

王子たる者、誰よりも明るく、強くなければいけない。

僕が弱いから、お父さんもポリーおじさんも…お母さんもどこかに行っちゃったんでしょう。

「僕の名前は勇輔。お父さんは田中裕樹。」

お母さんから僕を連れ去って、ずうっと僕を小さいお家に閉じ込めてたんだよ。

気の弱い親戚のおじさんと一緒になって、勇者ごっこしてたんだよ。

本当だよ」

僕の世界はすつきりと大きく広がっている。
きよとんとした顔の女の手を引いて、僕は「ケイサツ」へ向う。
勇者になりたかったお父さんを、助けるために。
僕自身の世界を守るために。

(後書き)

後から思うと、ホラーですね…

子どもは大人から与えられた世界で生きているのだと、伝えたかったのかも。

だから大人は大人らしく子供の世界を作っていかなければならないと、思ったのかも。

題名から話を考えると、ろくな内容になりませんね…反省
ファンタジー書きたかったのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7702o/>

フェスティバル王子

2010年11月7日21時04分発行